

そして、十月十二日であったか、日の丸の旗を掲げた日本船が入港してきた。思わず万歳をし、目が潤んだ。

昭和二十二年十月十三日、遠州丸に乗船、ナホトカを出港し、十月十六日、舞鶴に無事上陸し、帰郷することが出来た。

抑留の地へ慰霊訪問

財団法人全国強制抑留者協会は、平成元年頃から毎年、慰霊訪問を行っている。

私は平成四年に参加して、最初の訪問地ウランウデへ行った。この地域には、沢山の日本人墓地がある。骨一枚分ぐらいに仕切られたそれぞれの所に番号が付けられている。

一行の十二人で生い茂る夏草を取り除き、清掃して、中央に墓標を立てた。持参した酒や菓子などを供えて合掌した。団長が供養の言葉を述べるが、途中から嗚咽となり言葉にならず、一行も唯々涙々、案内のロシア人も貰い泣きしていた。また、奇しくもレンガ工場の犠牲者の墓でもあり、遠く離れたカザフのレン

ガ工場の友を偲び、込み上げてくる涙をどうしても押さえることができなかった。

シベリア抑留記

岐阜県 水野 隆 男

シベリアへ連行

開嶺南方若豆山の戦闘が終わったのは昭和二十年八月十六日。翌十七日は停戦と戦場整理。正午ごろ大隊は若豆山の戦死者に対して最敬礼の涙の決別をなし、陣地を後にし、ブハトにて武装解除、收容される。

私達は当然祖国へ帰還、復員できるものと考えていた。

ソ連軍人も、ダモイイ、ダモイイ（君たちは帰国できる）と盛んに言う。しかし、十月中旬、我々を乗せた貨物列車は新京方面へは向かわず、西に向かつて動き出し、ハイラル、満洲里を経てシベリアに向かった。そして我々三大隊主力（一個中隊及び一部は別）

のみが、チタ市周辺の寒村にあった「ノーバヤ收容所」に收容され、地獄のような酷寒の冬を迎えることになる。

一 ノーバヤ收容所

「ノーバヤ」はもともと囚人部落と聞いていた。まだ電灯もない寒村である。大きな建物と言えは製材工場くらいである。我々はその製材工場で働かされた。連日極寒の中での作業は身にこたえる。しかしそれよりも何よりも我々を苦しめたのは劣悪な食事である。ひどい時はエンバクを粥状にしたものが飯盒の蓋一杯が一食である。これが何日も続く。收容所に帰っても入浴もできない。栄養失調に加えて、虱の媒介による発疹チフスが蔓延し、翌年の春までに五百人中半数以上の戦友が故国に思いを残して次々と斃れていった。

強制労働

仕事は主として製材所であった。製材所は川の下りにあり、上流から流れてくる流木を巻き上げて製材所の所定の位置に高く積み上げる。その他製材、薪割

り、運搬等すべて我々が主力である。工場の行き帰りの引率と仕事の直接の指揮は日本軍将校であった。（私たちの場合は旧軍隊編成そのままでの收容所へ入り、翌年の春にチタ市へ移動して、この編成は解かれ将校と兵は別々となる）

工場は工場長と七、八人の職員と労働者、それに我々の監督とその助手のマダムくらいであり、「仕事ぶりが悪い」「休憩が長すぎる」と口やかましく指揮官の私のところへわめくように文句を言うのは監督である。ソ連の労働成績はすべてパーセントで決まる。我々をいかに能率よく働かせるかが彼の責任であり、必死になるのも無理はない。しかし私たちも必死なのだ。劣悪な食糧事情と收容施設（二段式板張り）、着替えもなければ入浴もない。すでに病人が続出していた。加えて日本人になじまぬ極寒の中での労働である。

果たして内地へ帰れるかどうか分からない。いや、何としてもこの人達皆を家族の元へ帰さなければならぬ。皆の体力の消耗を避けるために一時間に十

五分の休憩をとることを頑として譲らなかつた。「休憩！」皆は倒れるようにその場に座り込んだ。

軍医

今朝も下痢をしていた兵隊が引率途中で倒れた。栄養失調の上、下痢をした人間がこの寒さの中で働くのは死に直結する。絶対安静が必要だ。病人がその日の作業を休もうとするときはソ連軍の軍医の検診を受けなければならぬ。軍医の判定により休養が与えられたり、所内の軽作業に回されるが、これがなかなか厳しいのだ。軍医（女医）は、三十八度以上の発熱がなければ病人と認めないのだ。軍の規則だと言う。下痢をしたときは熱は上がらないのだということを、その日の朝、軍医とやり合ってきたばかりだったのに、しかし、その女軍医はけたたましくロシア語をまくし立ててそのことを認めようとしないのだ。

やがて約一カ月後には入浴・消毒・健康管理の手抜きが原因で赤痢が発生し、蔓延して、私を含めほとんど全員が生死の境をさまよい、部隊の半数以上が病死という惨事が訪れる。そして工場作業も中止となり、

その責任を問われてキャピタン（大尉である収容所長）と女軍医は降格のうえ左遷されることになる。

虱の大量発生

興安嶺でソ連軍と戦闘し、シベリアの「ノーバヤ収容所」へ入ったのが十月下旬、すでに一面雪に覆われて酷寒の冬を迎えていた。そして一カ月、昭和二十年の十二月を迎えようとしていた。その間、朝はコップ一杯くらいの水で洗顔した覚えがあるが、入浴はもちろんのこと、下着等の洗濯は何もやっていなかった。水がなかったのである。千メートルばかり離れた所に井戸があり、そこまで水を入れる酒樽のようなものを載せた馬そりによって毎日数回の水運搬をする。部落の住民たちもその井戸を使っていたようだから、恐らく大変貴重な井戸だったと思われる。

入浴、洗濯のない生活が戦闘期間も含めて四カ月近くも続いており、大量の虱が発生していた。暇さえあれば虱潰しをやっていた。私も内地の時からずっと身につけていた毛糸の腹巻が虱の巣窟となり、びっしりと卵を生み付けられていて、やむなく手放してしまっ

た。

食糧不足

当時独ソ戦に全力を尽くしたソ連は、食料も物資も底をついていた。民間人でさえ我々のところへタバコを持ってきて、僅かばかりの配給のパンや砂糖と交換していた。

入ソ当時は、旧日本軍の倉庫から我々と一緒に貨物列車に積み込まれた食糧があり、黒パン、砂糖も不足がちなが配給があった。しかしソ連軍人は我々の配給を取り上げていた。とくに米を喜んでいたので、米を粥状に煮て、それに砂糖を入れたのをバターがわりにパンに付けて食べていた。「日本のリース(米)、オーチンハラシヨー(大変おいしい)」と喜んでいた。しかし味噌だけは、「これは腐っている」と鼻をつまんで食べようとしなかった。おかげで初め暫くは薄い味噌汁の配給があった。

しかし一カ月もすると支給される食糧も極端に悪くなり、コウリヤンやエンバクをうすい粥状にしたものが飯盒の蓋一杯で一食分といった日が何日も続いた。

発疹チフスの発生と新谷一等兵の死

食糧不足と酷寒の中での重労働、体力の衰えたところへ風の媒介による発疹チフスの発生である。

最初に倒れたのは召集兵であった。当時の部隊主力は二十歳を過ぎたばかりの現役兵であったが、昭和十九年末から二十年初めごろに大量動員された三十五、六歳の召集兵も多数いた。十一月に入り、ばたばたと病人が続出し死亡者も増えていった。すごい発熱でうわごとを言う者も多かった。兵隊の部屋をのぞくと、まるで精神病院に行ったような雰囲気だ。私の顔をじーっと見て「隊長殿！ 只今から東京へ帰ります」大きな声で真面目に言う。熱で気が狂っているのである。

「復員指令部ができた」「来月は帰れる」というデマが盛んに聞こえてくるが、その発生源はどれもこの熱のせいらしい。

十一月二十五日「新谷が隊長殿にどうしてもお願いがあるそうです。すぐ来てください」との伝言が届いた。彼が重病であることは知っていた。早速彼の枕元

へ行く。「今家内が飛行機で飛行場まで迎えにきています。私を飛行場まで送ってください。お願いします」新谷はガッチリした体格と目の大きい頼もしい召集兵で、キビキビとよく動き、現役兵も一目置いていた優秀な召集一等兵であった。

そばの兵隊に聞いてみると、いくら戦友に頼んでも飛行場まで連れていってもらえないので私に頼んだそうだ。私の顔をじっと見つめた彼の大きな目からは涙が流れていた。私は何と答えて良いか分からなかった。元気者の彼も今はげっそり痩せていて昔の面影はない。彼は十日ほど前から寝込んでいて今は何も食べられないという。「そうか、良かったなあ。今は動くといけないそうだから、明日は飛行場まで送っていい」といけないうさだから、明日は飛行場まで送っていい」彼の手をしっかりと握ってやりながら、ゆっくり納得させるように話してやった。彼はその意味が分かったのか私の顔を見てにっこりと笑った。

新谷が死んだのは、翌日の夜明け前であった。その枕元には、なんとか食べさせようと炊事に行っている戦友が届けてくれた蒸したじゃがいもと、タバコの大

好きな彼が吸い殻を捨てずにうずたかく積み上げたものがあり、印象的だった。私が言ったとおり彼は次の日に家族と共に飛行場から故郷へ帰っていったのである。

後にこの収容所からチタ市へ移動するのであるが、当時の死亡者名簿はそのときソ連軍により没収されたが、今私の手元にある水野中尉のノーパーヤにおける死亡者名簿によれば、水野隊だけで死亡者四十九人のうち十一月五人、十二月十三人、一月十一人、二月八人、月日不明十二人となっており、十二月、一月が最も多い。全体としては五百人中二百六十二人までの死亡者名簿の数を覚えている。

水野隊の最初の死亡者は十一月十日に亡くなった静岡県岡野の牧野元一等兵で、眼鏡をかけた色白の真面目な召集兵で、復員した昭和二十二年暮れにその美しい未亡人が私宅を訪ねてこられ、当時の詳しい話を申し上げた。

煮沸消毒と水久保少尉

十一月も終わりころ、収容所長や軍医は虱の媒介に

よる発疹チフスの蔓延によりやく気づき、ドラム缶に
よる衣服の煮沸消毒や下着の洗濯に力を入れるように
なった。それでも二十人〜三十人が製材所へ駆り出さ
れていたが、やがてそれも中止され、比較的元気な者
は煮沸消毒、洗濯に回された。その他の仕事といえは
炊事勤務、水汲み、收容所を囲む鉄条網の整備、お墓
の死体埋葬の仕事があった。

女軍医が口やかましく虱の検査と消毒をするように
将校室へ督促に来るようになり、私たちも手分けして
仕事を分担した。しかし、まるで半病人のような者た
ちばかりである。仕事もなかなかはかどらない。この
とき活躍をしたのが水久保少尉であった。

彼は兵隊あがりの将校で大隊副官だった。また、銃
剣術の達人で、連隊でも優勝している。背も高く、体
格もがっちりしており、うろうろしている兵隊を叱り
付け、声を張り上げて洗濯や煮沸の仕事をどしどしと
進めていった。こんな時の彼の姿はまったく頼もし
い。栄誉や栄達のためにやっているのではない。もう
軍隊は解散しているのだ。彼はそのように皆を鼓舞し

元気づけて、一日も早く一人でも多くの戦友を救おう
としているのだ。しかし病人は次第に増え、人手が足
りなくなると、彼は水汲みの仕事もやっていた。墓の
穴掘り、死体の埋葬も率先して引率していった。その
元気なたくましい彼の姿は救世主のように私の目に
映った。

死体の埋葬と非情なソ連軍命令

十二月に入り製材所の仕事も中止された。大部分の
者がチフスに感染し、毎日のように死亡者が出た。そ
れらの戦友を比較的元気だった者が墓地へ運んで土葬
にするのである。私はついに一度も墓地へ行っていない。
しかし墓地へ行った者の話を聞いて悲憤やる方な
いものがあった。

まず戦友の死体はソリで墓地まで運ぶ。埋葬の位置
を決めると皆で雪を払い、その上でたき火をするので
ある。大地は酷寒の地で十二月に入ればかちんかちん
に凍っていて、まるでコンクリートのように硬く凍り
ついている。やがて地面が緩んできたころ、十字とス
コップで掘り起こし、またたき火をする。それを繰り返

返してようやく人体が入るまでの深さに掘って埋葬するのであるが、その埋葬が問題である。

ソ連政府の規則により着ていた衣類はすべて国家のものであり、すべてを脱がせて裸にして埋めよと言うのである。そんなばかげた事があろうか。日本だったら、「寒かったらうに……、死んでも寒くないように……」とせめて使っていた毛布の一枚でも遺体に掛けてやるのに……。かわいそうに衣服を全部脱がせて裸にして埋めたのである。

この事は、その後、ソ連側と幾ら交渉しても駄目であった。唯物論の国ソ連ではどうにもならぬ話だった。本当にひどい国だと思った。

その後死亡者もどしどしその数を増し、この穴掘りの人手も足りなくなり、遺体は春の雪解けまで、物置を改築した死体収容部屋に安置されたのである。

私も発病、高熱が続く

新谷が死亡した昭和二十年十一月二十六日ごろ、実は私も発病していたのである。「指揮官が病気になるていては申し訳ない」という気持ちがあったのだから、無理をしていたのである。十二月の初めごろ酒井軍医に診てもらったら三十九度の熱があり絶対安静ということであつた。発疹チフスである。

当時はまだ将校に当番がつけられていた。私の当番は浜田一等兵（現在も親交、東京都文京区でうどん店を経営、私の命の恩人）であつた。その後高熱が続いたが、それでも昭和二十一年元旦には同室の将校、当番一同は室内において遙か皇居に向かって敬礼し、部隊員が一人でも多く故国へ帰還できることを祈つたものである。

正月過ぎがいけなかつた。真夜中に襦袢・袴下（軍隊用語で、シャツとズボン下）だけで衣服、毛布を両手に抱え、室外へ出ようと戸を叩いたり足で蹴ったりして暴れていたのである。

私の発病以来、衣食はもちろん下の世話までかかりつきりで看護してくれた浜田一等兵の話によると、前にも同じようなことがあり、私の気づかぬように施錠していたとのことである。物音に気づいた浜田は慌てて私を引き止めようとしたのだが、ものすごい力で

押し返されたという。「家の者がタクシーで迎えに来ている、どうしても帰らねばならぬ」と、なかなか言うことを聞かなかつたらしい。同室の人にも手伝ってもらい、ようやく寝台まで運び、寝かしつけてもらったらしい。こんな姿で外へ出ていたら大変なことであった。零下四十度〜五十度で凍死である。

その後、私にとっては最大の危機がやってくるのである。一月の下旬ごろのある夜中、二段ベッドの下に寝ていた私が、上段に置いてあった飯盒に半分ほど入っていた水を全部ガブ飲みしてしまったのである。当番の浜田一等兵の説明によると、熱もやや下がり特別支給の米の重湯も食が進み快方に向かっていた矢先の出来事であった。その事は「もう病気は峠を越した。よくなったのだ」という生半可な自信がそうさせたのかも知れない。高熱で喉が渴いていたのも事実だ。それから間もなく高熱が続き生死の境を放浪することになる。

私は何人もの戦友が息を引き取っていくのを見とっている。そしてその臨終の様子はほとんど同じだっ

た。一週間くらいは高熱にうなされ、うわ言を言っているが、そのうちに意識がなくなり、ガーゴロ、ガーゴロと苦しそうな息遣いが始まる。喉に痰が詰まっているのだ。意識がないので痰を飲み込んだり出したりできないのだ。その間の時間は人によって多少違うが、口から泡を吹き出すようになると、もうほとんど駄目である。手ぬぐいやガーゼなどで口の中の泡をとってやるのだが、そのうちにいかにも苦しそうな息遣いとなり、う、う、う、と息を吸い込むのがやっとになり、そのうちに突然見る見る顔が真っ赤になり、ぐつと呼吸が止まる。やがてすうつと赤みが引き、青白い顔となる。臨終である。

私の意識はずうつと前からなくなっており、ゴロゴロと苦しい息遣いも始まっていた。やがて口から泡を吹き出し始めたのだ。それまで不眠不休で看護してくれていた当番の浜田一等兵も正直もう駄目だと思ったそうだ。同室の将校たちも、私の口の泡を拭き取りながら、「気の毒だが水野中尉ももう駄目だなあー」と小声でささやき合っていたそうだ。

その時そこへフィッと入ってきたのが酒井軍医中尉だった。鼻下にチョビひげを蓄えた酒井軍医中尉は部隊本部から大隊に派遣されてきた人だったが、大変気さくな人で、妙に彼とは気が合い平素から冗談など言い合ってきた仲で、私の様子を心配して見に来てくれたのだ。入ってくるなり「水野さんももう駄目だなあー」と言ったそう。当番の浜田一等兵はその酒井軍医に向かって「何とかしてあげてください」と何度も何度も頼んでくれたそう。実はそのとき酒井軍医の手元に最後の注射液が一本だけ残っていた。「どうせ駄目だが、じゃあ打ってみるか」。この一本の注射液が私を救ったのである。やがて口の泡がだんだん少なくなり、喉のゴロゴロも次第に静かになっていった。

(以上浜田一等兵の話)

意識を失ったのはせいぜい一週間前後だったと思われるが、元且に高熱を押して皇居に向かって敬礼した事ははっきり記憶があるが、それ以降二月の終わりのまでの二カ月間は、熱にうなされた闘病生活が続き、はっきりした記憶がない。まさに生死の間を放浪

していた二カ月であった。

俳優の丹波哲郎さんは死後の世界を確信され、霊界の存在を説いている人であるが、その著書『死ぬ瞬間の書』（廣済堂出版発行）の中で、「蘇生した数百人の人々の体験が集められ、その体験の多くに共通する現象が明らかにされた……。」とのニューヨークタイムズ紙の記事を紹介している。

私は、死んだのではなく死ぬ一歩手前の体験であり、正確には死から蘇生したわけでもないが、まさに死の直前まで行ったときの経験を記してみたい。

体験と言っても夢に近いものであるが、私は体験したと思っている。なぜならば夢は覚えているようだが忘れるものであるが、他人から見ると生死不明の昏睡状態にありながら、実は私は死の直前の……死に直面したただれもが経験するだろう大変恐ろしい体験をしていたのである。そしてその体験は五十年近く過ぎた今でもはっきり思い出すことができるし、まだその時の夢を見ることもある。

それは暗い恐ろしい道だった。ただ一本の道だけが

真っ直ぐに続いていた。恐ろしいがどうしても前へ進まねばならない。

大変寒い……気が付いてみると、私は深い深い谷にかかっている長い橋の真ん中近くまで渡ってきたのだ。人と擦れ違うことなど絶対出来ない、やっと歩けるだけの狭い板の橋だ。つり橋ならば手でつかんでいられる鉄線か何かありそうなものだが、それもない。こわごわ下の方を覗いてみる。恐ろしいほど深い千尋の谷である。谷の底は真っ暗でよく分からぬ。ただ下のほうから冷たい風がびゅうびゅう吹き付ける。とても寒い。

前へ進もうとしたが足が出ない。後ろへ下がろうとしたが足が動かない。手でつかんで身を支えるものがないので、体で平均を取るしかない。しかも橋の板が外れそうである。真っ暗な谷底へ落ちそうであるが、自分一人で辛抱し、頑張るしかない。一体どうすればよいのだ。恐ろしくて恐ろしくて身の縮む思いである。

橋の板を踏み外して真っ逆さまに真っ暗な谷底へ落

ちて行く自分の姿を見る。でも私はまだ橋の板の上に身をかがめて立っている。良く見ると自分の立っている板一枚が残っているだけで、谷の向こう岸まで続いていたはずの板の橋が突然なくなっていた。絶体絶命である。

深い暗い谷底の上に浮いている一枚の板だけが私を支えているのだ。ほかの所へ行こうとしても必ずまたこういう情景になるのである。

それが、どうしたことであろう。ふと前方を見ると、しっかりとした橋が向こう岸まで続いているではないか。足が自然に動いた。そして楽々とその橋を渡り向こう岸まで行くことができたのである。

向こう岸の山は子供のように遊んだ緑の葉のいっぱい茂った見覚えのある美しい山であった。私は死の一步前で助かったのである。

もう一度繰り返すが、私はこれは夢でなく死の直前の体験だと思っている。私はその後少なくとも一週間はまったく意識がなく昏睡状態が続いていたし、症状が回復するまでの二カ月間のことはほとんど記憶にな

いのである。

私が多たたく意識をなくし、昏睡状態になって口から泡を吹いているとき、実は本人がこんな恐怖感と戦い、一人で辛抱し頑張っているとは、病床で看護している人達は想像できないことであろう。

夢ではなく実際に体験したからこそ私は今でもその時の事をすっかり記憶していると思っている。熱にうなされたうわ言や寝惚けたのとは違うのである。私がその少し前に襦袢と袴下だけで室外へ出ようと暴れたことなど、全然覚えていないのである。

こうした私の経験から考えて、「あの人は良い往生だった」とか「楽にいけて良かった」等という話をよく聞くが、決してそんなものではないと思っている。必ず死の恐怖との闘いがあると思う。

しかし、いよいよ死ぬ時は楽になって、楽しい音楽や美しい草花の中に寝転んでいられるかもしれない。私に死の体験がないからそれは分からないことである。

この世の地獄

積み上げられたコチコチの裸の遺体

三月に入りようやく病人食の重湯からお粥が食べられるようになり、急速に体力が回復してきた。中旬ごろには床を離れて歩けるようになった。

「隊長殿にどうしても見てもらいたいものがあります」そう言ってきたのは指揮班長の松木軍曹であった。彼の案内したのは死体収容置き場であった（安置所とはとても言えない。物置を改造した部屋）。前にも記したように地面の凍結により埋葬ができず、雪解けまで死体はここに安置されていたのである。ソ連政府の規則により着ていた衣服はすべて国家の物ということで、裸のままのコチコチに凍った遺体が何段にも部屋いっぱい積み上げられていたのである。

私は思わず両手を合わせて合掌した。あの顔もこの顔も皆生きてるように静かに眠っていた。最初に私の眼にとまったのは俵上等兵だった。彼は私の馬当番で毎朝満馬に乗って私の乗馬を引いて官舎まで迎えに来てくれた宮崎県出身の丸顔で色白の美少年だった。呼びかければパッチリと目を開けそうな美しい死に顔

であった。大学出の秀才であり、あまり丈夫でなかった宮本一等兵、幹部候補生上がりの吉無田上等兵、元気で張り切っていた岩崎一等兵、いずれも九州出身の二十一、二歳の現役兵で一月〜二月死亡であった。温厚で優しかった木村軍曹の顔もあった。

私が生と死の境を放浪していた間に多くの有為な若者が故国に思いを残してあの世へ旅立っていったのであった。その無念やいかばかりであっただろう。

それにしてもコチコチの裸の遺体が部屋いっぱいにぎっしり積み上げられたこの光景は何と表現したらよいものか。まさにこの世の地獄図を見るようだった。何とむごたらしいことだろう。何とかしてやれないものか。それにしても、ソ連という国はとんでもないことをする国だ。悲しいかな、今の私は抑留者で何もしてやることはできなかった。断腸の思いで合掌して彼等と別れたのだった。

所長が交代して食糧事情良くなる

その後私は松木軍曹の指圧を受けながら、本部で勤務の割り振りや新所長の依頼により死亡者名簿の整理

等の事務の仕事ができるようになった。三月中旬ごろだった。

前所長（陸軍大尉）と女軍医は健康管理の責任を負わされ降格のうえ左遷となり、新所長となってからは食糧事情も良くなり、洗濯・煮沸・消毒も徹底するようになり、入浴もできるようになった。

誠に残念だったのは、率先陣頭に立って大活躍してくれた元氣の水久保少尉（大隊副官）が、無理がたたったのか、一月の初め私たち幹部全員の必死の看病も及ばず他界したことである。誠に惜しい人物であった。心から冥福を祈りたい。

初めての入浴

四月になって間もなくのこと、突然、留守番要員と病人を残して将校以下全員の集合命令が出た。手ぬぐいを持って並べと言う。何のことだかさっぱり見当がつかない。歩哨に聞いても分からないと言う。「どこへ行くのか」と聞いても「分からない」と言う。ソ連軍はいつもこの手だ（良い場合でも、悪い場合でも）。

例によって五列縦隊に並ぶ。日本式に四列縦隊では

九九が出来ないので人員の計算ができないのだ。あまり遠くまで歩いた覚えがないので、二キロも歩いたであろうか、古びた丸太小屋の前まできて「止まれ」と言う。そこには別の兵隊が二、三人待機していた。そして三十人まで数えて中へ入れと言う。私は先頭に立って中へ入る。建物の中は薄暗く、防寒靴を脱いで上がる。ソ連兵は手まねを交えて「ここで着衣を全部脱げ、脱いだ者から手ぬぐいだけ持って奥へ進め」と言う。良く見るとロッカーのような棚があった。

みんな裸になって中へ進む。中には半円形をした後方がぐつと高くなっている階段があった。マダムが二、三人出てきてくれたたましく何かを言っている。「階段の上にならんで腰掛けよ」と言っているのだ。蒸し暑くて息苦しく、薄暗くて何かイヤな予感があった。明かり窓は天井近くの側面の両側に二カ所あるだけである。

マダムたちもやがて正面の小部屋の中へ消える。辺りが一瞬シーンとなる。よく見ると正面の背の高さほどの所に覗き窓のようになった銃眼らしい窓があっ

た。あの窓から機関銃で掃射されたらひとたまりもない。彼等はこれから何をしようとしているのか、我々に一言も説明してないのが心配だ。食糧不足でもあるし、仕事もできない病人ばかりだし、我々はどこで極秘裏に抹殺されるかもしれない……ふと、そんな考えが事実私の頭をよぎった。

しかし、私の心配は間もなく消えた。

マダムたちが小桶に一杯ずつの水を皆に配り出した。そして「カマンジュールイエス！（指揮官はいるか）」と私を呼び付けて、「水は一人でこれだけしかないこと、顔・体・足の順序に洗うこと、この小さな石鹸は五人で使うこと、この事を皆に説明せよ」と言う。皆に説明が終わるとマダムたちが交替で小バケツに一杯の水を正面の石に勢い良くかけた。石は焼け石であった。ジャーッと水の弾ける音、水蒸気がもうもうと室内に立ち込める。二杯三杯と続けるうちに室内は水蒸気で二、三メートル先は何も見えなくなる。そのうちに垢だらけの体はむずがゆくなる。首や胸をかいていると垢がぼろぼろ落ちる。マダムがまたそはへ

来て大声でわめく。「体を擦れ」と言っているのだ。垢が面白いようにぼろぼろと落ちる。首・胸・手・足・背中は隣同士タオルでゴシゴシ。水の使い方はもうなれている。タオルに石鹸を付けそのまま顔・体・足の順に丁寧にも擦るようにして全身の垢を落とす。

最後は顔だけは桶の水をこぼさないように手で洗い、他はタオルで順に体を拭いて終わる。耳の中、手足の指の間まで綺麗に洗うことができる。小桶一杯で充分だった。

水の貴重さについては外地を経験した人ならだれでも知っているが、戦争経験はまた格別だ。「そんなケチケチした使い方をせずにもっと水をどんどんかえて使って……」今でも私はいつも家内からこんなふうに入浴の使い方について注意を受けている。

生氣よみがえる

昭和二十一年四月になって我々は初めての入浴を体験し、これが思いがけない焼き石の蒸し風呂であったが、そのころから収容所内に次第に生氣がよみがえっ

てきた。

少し余談になるが、間もなくこのノーバヤの収容所は閉鎖され私たちは市内のラーゲリ（収容所）へ移動するのであるが、チタ市はさすがシベリアの小モスクワを目指しているだけあって立派な都市であった。風呂は同じ蒸し風呂であったが、ポイラーからの水蒸気であり、シャワーもあり、水道の蛇口からの水は無制限であった。前にも述べたように囚人部落と言われたノーバヤとは随分様子が違っていたのである。

ノーバヤ収容所の四、六月の間の生活は食糧事情も好転し、さしたる重労働もなく、一面白雪に覆われていた原野にも雪解けが始まり、病人も日ごとに元気を取り戻しラーゲリ全体に生氣がよみがえってきた。所内を回っても熱にうなされてる者もなく、「元氣になりました」「心配かけました。もう大丈夫です」と元氣な声が返ってきた。もうこの人達と一緒に内地に帰ることができるという実感がわいたのは事実である。

それについても私の中隊で特に元氣者で常に皆の先

頭に立って頼もしい活動をしてくれていた上村、木村両伍長をはじめ、水野隊の一人一人の元気な時の顔が日に浮かんでくる。良い人たちがばかりであった。全く残念でならない。

共産主義労働体制の矛盾

作業終了の時、全く思いがけない言葉がマダムの中から飛び出すのである。「余った種芋はここに穴を掘って埋めよ」と言う。そんなことをして大丈夫かと念を押す。「今上司は遠くへ出張しているので、全部植えたことにすれば分からないので良い」と言う。六月ごろになって芽が出なければナチャーニクの責任であり私の責任ではないと言う。作業過程における責任体制がはっきりしているらしい。

私はほっぺを思いつき強く殴られたような衝撃を受けた。生産体制の基本はパーセントであるが、このような「ごまかし」が実在し、このような上司の目を盗んだ行為は下級労働者の特権でもあるらしい。ソ連邦の生産能力が向上しない理由が判るような気がした。

歩哨は知らん顔である。どうも日本人には理解し難い面がある。「貴方達は今日は全部出来たので一〇〇%である」……誠に楽しい一日であった。

この話はソ連生産体制の死角をつく極端な例であるが、私の体験した実話である。共産国の理想理念と現実とのギャップ（人間は神ではない）を見せ付けられた思いである。

私はその後チタ市に入り、ある理由から『共産党小史』をテキストにして勉強させられ、いわゆる洗脳教育を受けるのだが、どうしても共産国が好きになれないようになるのである。

ノーバヤ収容所時代を振り返って

地獄のような極寒の冬を越した昭和二十一年六月も中旬ごろだったろうか、ノーバヤ収容所は閉鎖され、五百人中の残存者約二百人は部隊編成を解かれ、チタ市内のラーゲリ（収容所）へ分散収容されることになる。

約二十二年の私のシベリア抑留生活の中で、このノーバヤでの八か月間は私にとっての抑留生活のすべてで

あり、あらゆる点での貴重な体験であった。特に入所してから一冬を越す翌年の三月ごろまでの期間は毎日が苦しみであり、惨めさ、焦り、悲観の連続であり、それがすべてであった。

飢餓と労働、寒さと病魔、祖国防衛のため満ソ国境に召された忠勇なる若き戦士達は、戦争は既に終わったのに、こんなシベリアの果てにおいて次々と涙をのんで逝ったのである。悲惨この上ないことであった。

しかし、いろいろな勉強もできた。初めてソ連領内の生活、下級労働者の生活、ソ連人気質、共産国の労働機構、体制護持のための教育など、すべて私にとって初めての体験であった。

もう一つ、私にはノーパーヤの生活が忘れられない理由があった。それは旧軍隊の部隊編成そのままであったことである。(この同志が中心となって戦友会を結成)

私は、故国へ帰って我が家の畳の上で新聞を広げて読めるような、そんな夢のような生活は当時はもう二度とあることはないと思っていた。将来の見通しも全

然立たず、現実はそれ程悲惨なものであった。しかし作業の合間や、へとへとになって僅かばかりの唯一の自分の領分である寝台に倒れ込んだ時、必ず目に浮かんでくるのは幼いとき遊んだ故郷の山や川であり、家族、知人、学友など愛する人々の面影であった。

ここで私はノーパーヤ時代を締めくくるに当たり、我々に夢を与え帰国の希望をつないでくれた自分達の作詩作曲したシベリア哀歌を紹介する。

故郷で待っているであろうその人の面影を思い浮かべながら……。

ノーパーヤの街から一日も早くさようならするその日を心に願って……。

一、君と別れて幾年の、

異国さすらい流れなら

この身あの月いとおしい

あゝ君ぞ待つ誰故に、

あゝ誰故に……。

二、幼き頃の思い出に、

故郷の夢を慕うては

流れる雲よ 野の果てよ

あゝ君ぞ待つ誰故に、

あゝ誰故に……。

三、ノーバヤの街よ

さようなら、

あの山この川さようなら

うるむ涙でな見えぬ

あゝ君ぞ待つ誰故に、

あゝ誰故に……。

二 機関車工場内の収容所

次に私が収容されたラーゲリは、機関車工場のおすぐ近く（あるいは工場内の敷地か）にあり、収容人員は三百人前後で比較的设备は良かった。

主な仕事は鉄道に関する事が多く、貨物の積み下ろし、工場内の雑役、それに旋盤工場。その他市内の道路工事、建設工事にも出ていた。私は工場内にある旋盤工場（溶接工も二、三人はいた）への引率が仕事で、このラーゲリにいた約二カ月（昭和二十一年六月

八月）はほとんど工場通いで他の作業の引率をした記憶がない。

日本の技術者

ソ連側の指示で調査して、旋盤・溶接の経験のある技術者二十人程であったろうか……を引率して工場側に引き渡して、後は工場内を見て回るだけである。日本人の中には未熟者もいたはずであるが中には素晴らしい熟練者もいて、ソ連労働者に技術のコツを教えて回っていた者もいた。仕事は旋盤が主であったが、溶接の技術の素晴らしい者もいた。聞いてみると工兵隊の兵隊さんだった。彼等は工場へ入ればもう捕虜ではなかった。ソ連労働者とは対等の立場、いや、指導者として尊敬され、上司からも大変重宝がられていた。「日本人の技術はオーチンハラシヨ！（大変素晴らしい）」工場のナチャーニク（工場長）は私の所へ来て盛んに感心する。おかげで私はこの工場では大変優遇され、一目おかれていた。何もやる事がないのでちよつと仕事の手伝いなどしていると「カマンジェール（指揮者）はそんな事をしなくてもよい。ここの椅

子に掛けておれば良い」とみんなが言ってくれる。技術の優秀な兵隊さんのおかげであった。

労働によって区分された食糧

ナチャールニクから収容所長に指名連絡があったのか、他の将校があつちこつちと作業引率が替わるのに私だけがずうっと旋盤工と溶接工の引率専任だった。

その点、他の将校からうらやましがられた。貨車への積み込みの仕事は特にこたえるらしい。ヤボンスキーは栄養不足で体力が弱っているのだ。六十キロ程のメリケン袋を時間内に貨車から大急ぎで運び出すのである。それが終わると次の貨車が入ってきて今度は積み込みである。「ブローハ、ラポート、ダワイ、ブイス、カレー（仕事振りが悪い、もっとしつかり早くやれ!）」の連続である。貨車の仕事は時間に制限があるからであろう。ソ連人は確かに体力は強い、彼等と比較されたらたまらない。工場内の雑役、道路工事、建設工事等も皆同様である。引率将校さん達は毎日苦勞があるらしく、「兵隊がかわいそうで……」と悲痛な面持ちであった。

抑留中は技術者（旋盤、溶接、大工、運転、縫製、炊事等）は大変有利であり、また、優遇されたのであった。その一つの例が食糧の配給区分である。チタ市へ入って初めて判ったことだが、配給の食糧はすべて労働に応じた基準ノルマがあり、そのノルマの達成率によって区分されていた。一〇〇％達成した者が黒パン三〇〇グラム、八〇％が二五〇グラム、最低が一五〇グラムで、一〇〇％達成は野外における筋肉労働では至難の技である。昭和二十年の冬を越すころは食糧事情も悪く最悪の状況であったが、年が明け四月頃よりやや好転し、このような制度が確立したのだから。

毎日その日の作業が終わると達成率による色分けの食券が配られる。それを食堂の窓口でパンと引き換えるのである。後にはスープも出るようになったが、そのスープの中身も量も％により区分されていた。そのほか、一週間に一、二回タバコ（マホルカ）と砂糖の配給があった。

私達引率将校は特別給与だったが、技術者には一〇

〇%以上の者が多かった。反対に肉体労働者は五〇%
、八〇%が普通で一〇〇%はまれであった。

食堂の片隅では、どこで手に入れたのかフォーク、
果物ナイフ、メダル等とパンの物々交換、また、ルー
ブル紙幣などによる売買、砂糖、タバコの交換など、
日本人のたくましさを見せつけていた。ついでに黒パ
ンのことに少し触れておぐが、日本のものよりキメが
粗く水気が多く少しすっぱい味で、慣れてくるとそれ
が結構おいしい。

三 第二〇五ラーゲリと第五十二分所

機関車工場にいたのは二カ月足らずで、八月初めご
ろ、将校のみが集められてチタ市郊外のキノン湖と呼
ばれた大きな湖のほとりにある第二〇五ラーゲリ（収
容所）に転編入させられた。

このラーゲリには約千五百人が収容されており、成
瀬少佐、岡田大尉などが大変張り切って全体をとり仕
切っておられ、私達が挨拶に伺うと、「ここにいる全
員の諸君を一人残らず内地へ帰すのが私の責任です。

指揮官が不足だったので、連側に要望し、貴官らに來
ていただいた。私もそのためにはこうして体力を作っ
ているのだ。」黒い縁どりの眼鏡をかけた若々しい成
瀬少佐は薪割りの手を休め、流れる汗をぬぐいながら
きびきびした口調で言われた。

まだこんな将校がいたのか。こんな張り切った姿の
将校はその後の抑留生活で見掛けることができなかつ
た。

ラーゲリ内には二十、三十の作業隊があり、私もそ
のうちの一つの作業隊を指揮することになった（五十
人、六十人ほどであったらうか）。

愛知県南設楽郡出身の竹下准尉が人事係として私の
補佐をしてくれることになった。毎日割り当てられて
くる作業内容に応じて一人一人の特技、健康状態を考
えながらテキパキと作業人員を割り振るのである。小
柄だが竹を割ったような明るい性格で人心の掌握に優
れていた。他の作業隊にはゴタゴタいろいろなこと
があったようだが、私の作業隊には面倒な事は一つも起
こらなかった。彼のおかげである。

余談になるが私は昭和二十二年十月に舞鶴に上陸、復員したが、そのとき彼の住所を調べ是非再会したいと二、三度手紙を出したのだが全然連絡がつかなかった。軍隊時代には全然関係がなく彼との出会いは偶然ではあったが、抑留生活を通して記憶に残る素晴らしい人物の一人であった。今でも会いたい一人だ。

第五十二分所へ最後の移動

昭和二十二年六月初め、我々将校のみ十五、六人は突然移動することになった。同じチタ市内で少し坂になった所に建っていた第五十二分所である。ここは将校のみを集めた収容所で、将校も召集の年配者が多く、作業隊の引率の仕事もなく、何組かに分かれて毎日軽作業に出ている様子だった。建物も比較的新しく、陽がよく当たり、明るい雰囲気がありほっとした。

また、そこには私と同じ第三大隊の歩兵砲小隊長で、開嶺若豆山の戦闘に参加し負傷した新村少尉が元気に活躍していた。彼はいつの間にかロシア語の勉強をし、毎日の作業についてソ連側との連絡や伝達の仕事をしていた。歯切れもよく、テキパキと行動する姿

は頼もしかった。

洗脳教育と軽作業

私達新入りの十五、六人は、ここへ来て一週間程の間、洗脳教育を受けることになった。「共産党小史」という辞書風の本を各自に渡され、これをテキストにして毎日午前中三、四時間、革命から統一まで、また、マルクス、レーニン主義を交代で輪読するのである。もちろん政治部員の将校も毎日来ては、後方で静かに見守っている。

私は共産主義には、ノーバヤでのジャガイモの種植え、またチタ市内でのレンガ運び、水道工事等の現場での矛盾を嫌と言う程見せつけられているのであまり関心はなかったが、それでも良い勉強になったと思っている。

一週間程で洗脳教育は終わり、軽作業に出ることになった。朝八時半ごろトラックに乗って一時間程の飛行場の修理工場へ行き、小部品のより分け作業で、ゆっくりやっても午前中で終わってしまう。飯盒の昼食を終われば帰りのトラックを待つだけだ。午後三時

ごろ、迎えのトラックに乗って帰る。

その後職場は転々とするが、内容は大同小異だった。作業隊を引率して現場の監督と渡り合った今までのラーゲリの生活とは雲泥の差があった。

四 チタ市を出発 祖国へ日本へ

昭和二十二年十月十日の朝、「荷物をまとめて全員広場に集合せよ」突然所長からの命令が伝達される。何の理由もなしの突然の命令だ。「ダモイだ」と引率の歩哨は言う。しかしこの言葉は絶対に信用できない。我々は今までこの言葉にだまされ続けてきたのだ。いずれかの収容所へ移動するのだと皆がそう思っていた。

しかし今回は少し様子が違っていた。チタ市内の各収容所から続々とチタ市駅に集合したのだ。人員ははつきりしないが、千人〜一千五百人程だったろうか。

我々を乗せた貨物列車は、その日のうちに東方に向かって出発したのだった。列車はカリムスカヤを通

り、シベリア鉄道を一路東に向かって進み、一週間後の十月十七日には日本海に面したナホトカ駅に到着した。

私は初めて祖国日本への復員を確信することができた。港周辺一帯には一面に天幕が張りめぐらされ、一万人余の人たちが乗船の日を待っていたのである。

後日聞くところによると、ここまで来て再び作業隊に編入され、一年近くも帰国が遅れた人々もあったそうだが、私たちは運よく三日後に入港して来た永徳丸に乗船、十月二十一日に出港、十月二十五日に舞鶴に上陸することができた。

日の丸の旗がひらめく永徳丸に乗船の際、艦上に列をつくって出迎えの若い看護婦さんたちや船員の人たちからにこやかな笑顔で「長い間御苦労さまでした」と一人一人から温かく丁寧なあいさつをされたときは、「これで本当に日本へ帰れるんだ」と思うことができた。相手がソ連兵でなく、日本人だったからである。

艦内で久しぶりにいただいた白米の御飯と味噌汁の

味は格別だった。

【執筆者の紹介】

岐阜県瑞浪市在住

昭和十五年 岐阜師範学校卒業

土岐市泉町小学校新任

十六年 中部四部隊入営

豊橋陸軍予備士官学校入学

十七年 任陸軍少尉

十九年 任陸軍中尉

二十年 日ソ開戦 シベリアに抑留さる

二十二年 帰国復員

二十三年 教職復帰

土岐市土岐津中学校校長を最後に勇退

全抑協では県連事務局長として永年活動されまし

た。

(岐阜県 鈴木 善三)

シベリア抑留記

静岡県 小川 賢 介

私は、千葉県銚子市に大正十年三月二十八日生まれた。家族構成は、父、母、男六人女四人の兄弟姉妹で、この中から男二人が病死。私は次男である。

昭和十七年四月、私は現役兵として三島市中部第九部隊(野戦重砲第二連隊)に入隊。一期の検閲後の十七年十月渡満開始。一個中隊四十人で六個中隊三百人、他、将校二人、下士官十五人程の編成で三島駅を発つ。兵隊は完全武装で下関より釜山へ。それから貨車で京城、新義州より満州に入った。貨車の中は白く凍りついた。

三日程して錦州に到着、錦州の部隊官舎は、支那軍の放棄した兵舎をそのまま我が軍の宿舎として使用していた所に入ることとなった。それから二カ月過ぎた十二月二十五日に部隊の移動が始まり、北の方の牡丹